

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390100388		
法人名	山清福祉会		
事業所名	グループホームほほ笑み		
所在地	熊本市東区戸島西5-5-26		
自己評価作成日	令和6年1月26日	評価結果市町村受理日	令和6年4月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1		
訪問調査日	令和6年3月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

建物は木造平屋造りで、家庭的な雰囲気が魅力の1つ。広々とした敷地にグループホームと同法人が運営する保育園があり、子ども達の楽しそうな声が聞こえてきたり、一步外へ出れば日常的に触れ合える機会もある。また交流会も月に一度開催している。また病院受診なども事業所にて行っており病気や怪我の対応も安心して頂けます。建物に入れば猫が出迎え、美しい魚達が優雅に泳ぐ水槽もあり、癒しの空間が広がっている。多くの職員が常に向上心を持って日々のケアにあたっており、スキルアップ制度を活用し介護福祉士の資格取得を果たした後も、その知識・技術を活かしながら、更なる経験を積んでいる。また産休、育休を経て復帰した職員の実績もあり、勤務年数が8年を超える職員が大半である。一昨年に人事考課制度を導入したところだが、仕事内容やスキルアップに必要な条件がより明確になったことから、一層職員の意欲が高まっている。また職員の顔ぶれが変わらないことで、ご利用者様の状態把握がしやすく、結果ケアが手厚いものになっていることは、ご家族にとっても安心の要素になってい

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームに隣接して同一法人の保育園があり、日常的に園児の姿が見られ、声が聞こえる環境にある。コロナ禍においても面会はできるだけ制限せず、居室でも行っている。また、ラインやズームも活用できる環境や、面会室も整備しており、家族アンケートでは感謝の声がいくつも述べられている。外出・外泊も可能で、家族と一緒に我が家を見に行ったり、旅行に行く入居者もいる。建物は木造で、リビングには優しい照明が使われ、2匹の猫が自由に動き回って癒しを与えてくれており、穏やかな暮らしが伺えた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当初に「環境・愛情・清潔・安全」への思いを込めて管理者と職員とで作成した理念があり、定期的な職員会議の中で、理念の共有を図っている。	管理者は、理念をケアの統一のための指針として、「ほほ笑みの理念と考え方について」まとめ、新人の研修時に配布・説明している。しかし、最近は全職員が一堂に会する機会の確保が難しく、理念の浸透を確認する取組が充分ではないように伺えた。	理念をケアの指針として共有し、実践への反映を確認する取組があると良いと思われる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、地域の清掃活動に参加したり、青少協の会議や地域住民の会合に場所を提供している。また、地域の中学校や保育園との交流事業も実施している。	現在は、職員が地域の清掃活動に参加したり、中学校の生徒が敬老の日にお花を持って来訪する等の交流が行われている。コロナが落ち着いた際には、以前のように、近くのスーパーへの買い物・隣接する保育園との交流・地域団体の会合への場所提供等、再開したいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括支援センター主催の認知症介護家族の会合場所として、当事業所の和室が活用されている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入退所、職員配置等の運営状況や、イベント開催の様子、利用者の暮らしぶり等を主な議題として、出席者との意見交換を行っている。	コロナ禍のため、運営推進会議は書面による開催が継続しており、利用者状況・職員状況・活動状況等を報告する資料を委員に送付している。意見等を返信してもらう書類を添付しており、家族委員からは資料を見ての感想等が寄せられている。	コロナ禍の間に、委員の減少や高齢化が進んでいるとのことであり、対面での会議を再開するにあたっては、新メンバーの依頼が必要になってくると思われる。また、最初の対面の会議では、グループホームの概要や運営推進会議の趣旨・委員の役割等説明して協力を求めることも期待される。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議への地域包括支援センター職員の参加、事故発生時の連携はもちろん、必要に応じて市の担当者とも報告・連絡・相談・確認の作業を行っており、市町村と共にサービス向上に取り組む体制を整えている。	運営上の疑問点等は、市担当者に質問票を送付して相談し、適切に回答を得ている。また、包括には日頃から困りごとなどを相談しており、協力関係が築かれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3か月に1回、身体拘束委員会を開催し、また年に2回は動画を活用した研修会を開催している。身近に起きた事例をテーマに皆で話し合ったり、特に言葉による抑制については、十分に話し合うようにしている。	3ヶ月ごとに正職員による身体拘束委員会を開催し、職員全体に伝える事・研修内容等を検討した上で、年2回の研修を実施している。スピーチロックや徘徊への対応など、資料を作成して個別に説明したり、動画を見ての感想やポイント等の提出を求め、学びの確認を行っている。また、虐待事例についての話し合いや、定期的にチェックシートによるケアの振り返りを行い、身体拘束をしないケアについて職員の意識の向上を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	3か月に1回、虐待防止委員会を開催し、また年に2回は動画を活用した研修会を開催している。特に虐待の芽をとるグレーゾーンの介護については、議題として多く取り上げるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修への参加や、ミーティングの際に権利擁護について意見交換を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は入所の前に一度内容の説明を行い、入所日に再度の説明を行っている。これは、理解と納得を得られるよう十分な時間を確保し、一方的な説明にならないよう留意しているためである。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	国保連の苦情対応ポスターを事業所内に掲示している。また折に触れて、日常生活のご様子を動画配信している。ご利用者様の近況が伝わりやすく、ご家族からの要望や隠れていた思いを聞く良い機会となっている。月末にはひと月のご様子をまとめた手紙を送付しており、面会時にもより細かな情報をお伝えするようにしている。	面会は、希望に応じて居室でも行っている。また、ラインやズームも活用している。面会時や電話等で家族に入居者の近況を伝え、意見・要望等を尋ねているが、持ち込み品の問い合わせ等はあるものの、要望等はほとんどない。毎月、入居者の近況を伝える手紙と写真を送付して、家族の安心に繋げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的にミーティングを開催し、その中で運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	職員全員で集まって話し合う時間は取りにくく、その時その場に居る職員でその都度話し合い、管理者に相談し、必要に応じて管理者が意見を聞いて決定し、申し送り時や申し送りノートで共有している。	月に1回、短時間でも、職員全員で意見交換し合える機会を設けることが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各自が向上心を持って働けるよう社会保険労務士に専門的な指導を仰ぎながら、職場環境の整備に努めている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所独自のスキルアップ支援制度を策定し、介護に関する資格取得を支援している。また動画研修や外部研修に参加できるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他事業所の管理者や職員と定期的に情報交換をしている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	主な利用サービスの担当者との情報交換や三者面談、ご家族も交えた四者会談を駆使して、ニーズの掘り起こしと把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	主な利用サービスの担当者との情報交換や三者面談、ご家族も交えた四者会談を駆使して、ニーズの掘り起こしと把握に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初回の見学時や利用申込書提出時に面談の時間を設け、現状とニーズの把握に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物畳み、お盆拭きやおしぼり作り等の日常の家事を一緒に行い、本人が介護される一方の立場におかれぬよう留意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の会話等から聞き取った内容(食べたい物、会いたい人、行きたい場所、欲しい物等)を、本人の要望としてご家族にお伝えし、必要に応じて対応をお願いしている。またケアの一部として、本人から家族への電話についても協力をお願いすることがある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職員は面会者とも交流を持ち、電話や面会がスムーズにいこう手助けしている。また足を運びやすい雰囲気作りをしている。	家族の他、時には親戚・友人等の面会もあっており、来訪しやすいよう面会室も整備している。家族と一緒に我が家を見に行ったり、旅行に行く入居者もいる。面会・外出・外泊等、できるだけ制限せず、馴染みの人や場との関係継続支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が間に入って、トラブルの事前回避に努め、相互理解の促進を図っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了後も、利用者が他のサービスをスムーズに受けられるよう、必要に応じてカンファレンスへの参加や情報提供を行い、継続的な支援を続けている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人やご家族、主なサービス担当者からの聞き取り等による情報収集、及び入居後の職員の気付きによって意向や希望を把握している。	「書き物をしたからノートが欲しい」「甘いものが欲しい」と意向を伝えることができる人もいる。意向の表現が難しい人は、そわそわしたり、怒りっぽくなったり等の表情や仕草・行動から思いを推測し、その都度対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人やご家族、主なサービス担当者からの聞き取り等による情報収集によって、一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人やご家族、主なサービス担当者からの聞き取り等による情報収集、及び入居後の職員の気付きによって一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状を総合的に把握するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居前の情報や家族からの情報を元に、概ね1ヶ月程度の状況把握期間を経て介護計画を作成している。入居後はミーティング内で情報を共有して話し合いを重ね、今必要なケアを介護計画に反映させるようにしている。	ケアマネが3ヶ月ごとにモニタリングを実施し、記録を確認し職員の意見を聞きながら半年ごとに介護計画の見直しを行っている。入居者の不安感をなくし、安心して生活できるような計画作成を心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	食事や入浴等の時間に関しては、本人の様子に合わせて柔軟に対応している。その時に食べたい物、欲しい物のリクエストがあれば、可能な限り希望に添えるよう対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元中学校や併設の保育園児との交流会を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	4週間に一度の協力医療機関往診を基本としているが、以前に受診していた病院や専門医等の受診希望があれば、当事業所が通院に係るすべてを行う形で支援している。また突発的な体調不良については、その都度医師への相談や受診の支援を行っている。	かかりつけ医は入居時に本人・家族の了承を得て、現在はほとんどが協力医療機関としており、4週間に1回の往診を受けている。体調に異変が生じた時は協力医療機関外来に連絡し、指示に従って対応している。夜間に職員が判断に迷う時は管理者に連絡を取り、状況により日赤の救急外来に搬送することとしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員の情報や気づきは、往診担当者や管理者からかかりつけ病院の看護師を通じて、医師の判断を仰ぐことができる体制となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院で開催されるカンファレンスには出席しており、退院に向けた調整には積極的に関わっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	協力医療機関と本人、家族を交えて定期的に話し合い、方針を考えていく。	ホームで看取りは行なっておらず、入居時にホームで出来ること出来ないことについて説明している。重度化した際は、家族と協力医と話し合っ対応することになっているが、食事が入らなくなった場合は基本的に入院となる場合が多い。最期までホームでお願いしたいという家族には、訪問看護と連携している有料老人ホームや、医療療養型病床など対応可能な施設を紹介するなどして対応している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署に講習会を依頼し、AEDの使い方、心肺蘇生法、異物除去、応急手当の仕方等について、学ぶ機会を作っている。利用者の突発的な症状については、24時間看護師または、かかりつけ医の指示を仰ぐことができる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練を実施しており、昼夜の非常時に備えている。また今年度より、協力医療機関が主体となつて行う大規模BCP訓練にも年1回参加している。災害時には、地域の医療機関や介護施設等と連携し、利用者の安心・安全を確保することとしている。	年2回、日中・夜間想定での火災避難訓練を実施している。また、協力医療機関で行われたBCP訓練にも参加し、地域の病院や施設等との連携を図っている。食料備蓄は3日分確保し、期限を見て入れ替えを行なっている。BCPは策定済みであり、4月以降勉強会を行って周知を図ることとしている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	研修や、研修後に「振り返りシート」によって自身の行っているケアを振り返る機会を与え、人格の尊重やプライバシーについて学ぶ機会を設けている。	身体拘束廃止の研修や、チェックシートによる自分のケアについての振り返り、虐待事件の事例検討等により、一人ひとりの尊重とプライバシーの確保について学んでいる。言葉掛けについては、大きな声を出さず、優しい口調で行うよう心掛け、安心して過ごせるよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が思いや希望を表せるように働きかけたり、分かる力に合わせた説明を行い、自分で決めたり納得しながら暮らせるように支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間等大まかなスケジュールは用意しているが、レクリエーション参加や日中の過ごし方、就寝時間などは各入居者のペースに合わせて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装は原則的に各利用者が自由に選択したものを着用している。自己決定が難しい利用者については、職員が利用者の好みに合わせて選択している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	簡単な調理前の下準備や、下膳後の片付けなどを入居者と一緒に行っている。一品でも自力摂取ができるよう、主食の形態をおにぎりしたり、食事をのせたスプーンを手渡し、後は自力で口に運べるよう促す等、個々の状態に合わせた支援を行っている。月に1回程度は行事食があり、デザート作りを一緒に行う場面もある。	食事は外注しており、冷凍やチルド状態で届けられたものを湯煎し、味を調整して提供している。お正月・ひな祭り・子どもの日などには行事食を出したり、誕生日にはケーキでお祝いしたり、時には一緒におやつ作りをすることもある。	職員が一人でも同じ食事を摂り、味、食べやすさなどの気づきを業者に伝えていくことで、より良い食事に繋がっていくものと思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者様の好みに応じてジュースや漬物、ふりかけ等を準備している。また本人の状態に合わせ、食形態の見直しについてはこまめに行っている。その他、栄養補助食品も活用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯の洗浄や歯磨きの部分的な介助など、一人ひとりの口腔状態や能力に合わせた支援を行っている。また義歯の微調整や治療、口腔ケアがスムーズに進むよう、歯科やご家族との連携を図っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	必要に応じて時間による誘導やポータブルトイレを活用などの手段を講じ、排泄の自立にむけた支援を行っている。また常時おむつ着用の人に関しても、排便を促す為にトイレへ誘導することがある。	日中は基本的に、時間や表情・動作等を見ながらトイレに誘導し、排泄支援を行なっている。夜間はポータブルトイレ使用の人や、夜間のみオムツ使用の人もあり、それぞれに応じて支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	トイレ誘導時に腹部マッサージを行い、排泄を促している。またヤクルトやヨーグルトを摂取して頂き、腸内環境を整える手助けをしている。排便の状況によっては医師と相談の上、下剤の調整を行なっている。定期的な水分補給や体操によって、腸の働きが改善するよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	リフトの活用により、多様な入居者が安全で快適に入浴できるようになっている。入浴予定表に沿って実施するが、入居者の体調や気分によって、入浴日や時間を柔軟に変更し対応している。	入浴は週2回を基本としているが、希望により3回入る人もいる。リフト装置を設置しており、全員が浴槽に浸ることができる。お風呂ではマンツーマンで落ち着いて話ができ、若い頃の話や希望を聞ける機会ともなっている。リラックスしてゆっくり入ってもらい、気持ちの良い入浴となるよう心掛けている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間の休息は、基本的に自由にとって頂いている。夜間は安心して眠れるような環境を整えている。また必要に応じて、眠剤等の使用を医師や家族と相談している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬手帳を活用しており、更に薬の内容と効用に関する資料を利用者台帳に加えている。必要に応じて医師や薬剤師に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみやお盆拭きなど、能力に応じた役割を分担したり、事業所内にて猫を飼育することで日常生活に楽しみと変化を持てるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩をレクリエーションの一環として実施している。同一敷地内で遊ぶ園児との交流がある。また道端に咲く草花を觀賞しながら、外気浴を楽しめるよう支援している。希望に応じて近所のスーパーなどの外出支援も行っている。	天気の良い日はできるだけ散歩したり、希望により近くのスーパーに買い物に出掛けたりしている。また、初詣や桜見学のドライブなどを行い、気分転換を図っている。	今後は、コロナの状況を見ながら、季節の花見など外出の機会が増えることも期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物の際には、レジでの支払いを手助けしながら一緒に行く。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望に沿って、家族や友人に電話をかけたり、ハガキを送ったりできるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	吹き抜けになった天井や天窓により、採光や換気に配慮した設計になっている。冬は床暖房による柔らかな暖かさが足先まで届き、猫が足元に寝そべっている。また和室が開放されており、随所にソファも配置してあることから、利用者は思い思いの場所で過ごすことができる。	建物は木造で、リビングの天井は高く吹き抜けで明るく開放感があり、テーブル・椅子・テレビ・熱帯魚の水槽・空気清浄機などが配置されている。周囲の壁には折り紙で作った季節ごとの飾り物が掲示され、楽しい雰囲気である。2匹の猫が自由に動き回る穏やかで優しい空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室が開放されており、随所にソファも配置してあることから、利用者は思い思いの場所で過ごすことができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室には、家族と相談しながら使い慣れたものや好みのもが持ちこまれている。また掃き出し窓から中庭・ウッドデッキへ直接出られるように工夫されており、外気浴がしやすい設計になっている。	各居室には、洗面台とクローゼットが取り付けられており、すっきりとした印象である。広いバルコニーがあり、居室からそのまま出ることができる。家族一人ひとりの名前と曾孫さんの年齢を記入した写真や、花が飾られた部屋からは、家族の深い愛情が感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	席の配置や行事のグループ分けは、人間関係、趣味、能力、理解力等を考慮して行っている。同グループの利用者と時に協力しながら、自立した生活を長く続けていけるよう支援している。職員は自立を促しつつ、陰ながら危険回避に努めている。		